

「古い民家には日本人が積み重ねた木造の住まい造りの知恵が蓄積されている。そうした知恵を学びつつ引き継ぎたい」

社等を中心に手掛ける建築会社、石田組（諏訪市四賀）に十四年勤めた後、二〇〇四年に独立。古民家再生や興産材を使った木造住宅建築に取り組み、現在は、下諏訪町の大社通りの歩道拡幅工事に伴い、大正前期

# 想い語らい

に建てられた町家の奥行きを狭める工事を進める。正面からの外観は変わらないよう、使われていた素材を生かしての再生だ。

〇一年の農水省の調査によると、県内には三千七百七十軒のかやぶき民家が残り、全国でも福島県に次いで多かった。しかし、「残

したい」と語るのは年に二、三軒、長年住んでいる人にとっては住みにくさばかりが目につき、壊したいとの依頼の方が多い」と残念がる。

二百五十年前に建てられた古民家を再生した際、松の梁（はり）を短くしよと切ったところや二がしみが出た。「木は何年たっても生きていけると実感した。今年三月、岡谷市の区画整

理に伴って取り壊しを依頼されたかつての製糸家の蔵は「すべて栗材の立派な建物。建て直せるように解体してすべて引き取った」。

古民家に対する愛着は人一倍強い。かつては一軒の建物を、二、三回移築して活用するのが普通だったという。家が使い捨てになったのは昭和三十年代後半半からではないか。外国から安い材木

が入るようになり、製材技術の向上も伴って手ごろな価格で家が建つようになり、状況が変わったとみている。

高校を卒業後、実家が営む鉄工所の仕事で鉄骨住宅造りにかかわったのが住宅建築との出会い。しかし、三十六歳で転機が訪れた。脊髄（せきずい）に腫瘍（しゅよう）が現れ、摘出。重い鉄材が持てなくなった

ことをきっかけに、木造建築の柔らかさや安心感に一層引かれ、石田組の門をたいた。

木造建築には、柱や梁、土台の接合部を、くぎなどの金属を使わずに組み合わせる「継ぎ手」や「仕口」という伝統技法がある。「見えない部分だが、大工たちは、それらの組み方で美しさを競った」。「木造建築の美しさ、精度を追求し、

古民家再生に取り組む建築士

関 謙二さん 54歳

諏訪市四賀



日本の伝統技法が詰まった古民家の魅力を語る関謙二さん

完成させたのは日本だけ」と強く思っている。古民家再生は、新しい家を建てるために古い家を早く手放したい、持ち主と古民家暮らしにあこがれる購入者をいかに出会わせるかが課題。所属するNPO法人「日本民家再生リサイクル協会」（本部・東京都）は、譲れる状態にある古民家をまとめた「民家バンク」で情報を提供している。

「今は、購入希望者が登録軒数を下回る状況が続いている」が、〇七年から団塊の世代が大量に定年退職を迎えるのを前に、「定年後を田舎の古民家で暮らしたい」と思っている人が多いことに希望を見いだす。

「古民家での田舎暮らしを求める人たちの予算はだいたい土地、建物を含めて二千万円くらい。三千万円程度かかるのが現状だが、逆に二千万円で提供できれば、購入者は増え、古民家は残る。できるだけ希望をかなえたい」と熱く語った。

# 木造建築の知恵を引き継ぎたい